14　次の文章は、二宮正之『小林秀雄のこと』からの一節である。読んで問いに答えよ。　　　　　　　　　　　　　　　　　〈東北大〉二〇二二年度出題

　一九五九年に発表された「良心」は、発見機を主題にした文章だが、そのなかにこんなくだりがある。

考へるとは、合理的に考へる事だ。どうしてそんな馬鹿気た事が言ひたいかといふと、現代の合理主義的風潮に乗じて、物を考へる人々の考へ方を観察してゐると、どうやら、能率的に考へる事が、合理的に考へる事だと思ひ違ひしてゐるやうに思はれるからだ。当人は考へてゐるりだが、実は考へる手間を省いてゐる。そんな⑴コウケイがる所に見える。物を考へるとは、物をんだら離さぬといふ事だ。画家が、モデルを摑んだら得心の行くまで離さぬといふのと同じ事だ。だから、考へれば考へるほどわからなくなるといふのも、物を合理的に究めようとする人には、極めて正常な事である。だが、これは、能率的に考へてゐる人には異常な事だらう。（『全集』12・五八）

　一読したかぎりでは、簡単明瞭な文明批評の文章のようだが、よく見ると、豊かな内容の含まれていることがわかる。まず、「合理」という言葉であるが、これは僅か二行のあいだに肯定的な意味と否定の色合いとの両方に用いられている。最初の「考へるとは、合理的に考へる事だ」という部分では、、積極的な意味を託されているが、次の行の「現代の合理主義的風潮」という表現になると、すでに否定の色を帯びている。しかもそれが、引用末尾の「物を合理的に究めようとする人」では、再び肯定的になる。ここで、「様々なる意匠」の冒頭の部分が思い出されるのだが、小林は、長い作家生活の当初から、言葉の両義性・多義性を認識しており、そこに言葉の魔術を見ていた。そこにこそ、言葉の命の源があるというのであった（『全集』１・一一）。「合理」という分かりきったような言葉も、小林においては、（ｱ）標本になったのように固定してはいないのである。従って、この文章のなかで積極的な意味で用いられていると言っても、そのような明確な定義がくだされているわけではない。そもそも、切り離した単語に定義を与えることは、小林の思考法とは異質なのである。そこで、合理的と能率的とは違う、とか、（合理的に）考えれば考えるほどわからなくなるのがあたりまえだ、とかいう表現になる。積極的な意味付けとして、小林は「物を考へるとは、物を摑んだら離さぬといふ事だ」とも強調する。しかし、ものを摑むとか、画家がモデルを摑むとは、なにを意味するのか。必ずしも自明のこととは言いがたいので、もうすこし、丁寧にみておこう。

　その意味で、同じ「考へるヒント」中の「役者」（一九六〇）という文に面白い一節がある。合理的という言葉が、非常に卑近な話題のもとに、次のように使用されているのだ。芸術座で⑵ジョウエンされていた菊田の大衆劇「がめつい」をた小林秀雄は、主役の愛子だけが人気をさらう理由を解いて次のように述べる。

事実、この金貸しのさんだけが、たつた一人の劇的人物なのである。かといふとこの人物だけが合理的に生きようとしてゐるからだ。逆説ではない。多くの人が劇的といふ言葉を誤解してゐる。でたらめな事と劇的な事とは違ふのだ。偶然は事故を生むが、決して劇を生みはしない。この婆さんだけが人間らしい意識を持つてゐる。偶然は彼女をとりこにする事が出来ない。彼女は、金をめようと自身に誓ひ、その誓ひのとりことなつてゐる。彼女の性格が劇を生む。（『全集』12・七六）

　ここでは、知識人の思考方法という水位ではなく、いわゆる市井人の物欲に突き動かされた生き方がとりあげられており、「合理的に考えること」ではなく「合理的に生きること」が論じられているのだが、小林の場合、「生きる」と「考える」は人間の行為として基本的に一体をなしているのだから、同じ問題を扱っていると言ってよい。画家がモデルを摑んだら得心のいくまで離さないと言われてすぐには合点のいかない者も、（ｲ）欲の皮のつっぱった人間がけをれに誓う話ならば、立ちどころにわかる。しかも、小林秀雄は、金銭欲にとらわれその⑶ジュウソクの意志と欲望とをもって生きる老婆だけが、たったひとり「人間らしい意識を持つ」と高く評価するのである。

　では、「人間らしい意識」とは何を意味するのか。この問いに対する答えの手掛かりは、文中にある「偶然」という言葉が示唆している。人間らしい意識をもっているおかげで、この人物だけは「偶然」のとりこにならぬ、という。他の登場人物は「偶然」の出来事に⑷ホンロウされているというのに、この金貸し婆さんだけがそれを免れているのはなぜか。小林はその理由を「誓ひ」という言葉であらわす。要するに、人間が自分としての目標を定めてそれに忠実であろうとするということである。とすると、守銭奴の誓いも、根本的には、人間の意志の関与する余地のない「自然」と人間が作り出さなければ存在しない「歴史」との関係にゆきつく。つまり、自然の非情な合理性にたいする人間の関わり方、あえて言うなら、「自然の合理」に対する人間の態度決定の問題になる。この点に関する小林の見解は、「ドストエフスキイの生活」の序として書かれた「歴史について」（一九三八―三九）に意を尽くして展開されているが、えて要約すると、つぎのようにいうことができるだろう。自然界の因果律に従って生起する事象を支配する合理性は、人間には、どうにもとりつきようのないものであるが、人間は、単に「自然」のうちにあるのではなく、言葉によって「歴史」をつくり「歴史」の中に生きていく。そうして人間は人間としての存在理由をもつことができる。それが、人間らしい意識をもつということであり、その存在理由を全うする方向にはたらく思考あるいは生き方を、ここで小林は「合理的」といっているのではないだろうか。

　もう一歩話をすすめるなら、こと人間的観点に立つかぎり、いわゆる科学的合理性に基づいてどこまでも見通し可能の因果関係を適用することは、人間にとって合理どころか、逆に「不合理」なのだ。このことを、小林秀雄は、これも「考へるヒント」中の「常識」という一文で、平たく見事に表現している。たとえば、ことの成り行きを先の先まで御存知の神様同士が、つまり客観的条件内における因果関係を完全に読み切る能力を持った者同士が、「人間の一種の無智を条件としてゐる」将棋という遊戯を指すことは、人間の理に合わない（『全集』12・二二）。（ｳ）先手必勝の将棋には何の意味もないのである。これが将棋のような遊びならばよいが、人生の最期の一瞬まで見通しとなったらどうするのか。行き先を見通された人間が、いかに急速に人間でなくなるか、その見本は、シェイクスピアが『マクベス』で如実に描きだしている。

　人間と自然の出会うところは、同時に「必然」であり「偶然」である。自然の因果律の節目節目は、単に自然現象としてみれば「必然」である。この必然を人間との出会いという観点からみて人間はそれを意識の側から偶然と呼びかえることもできるわけだが、それはそのまま小林秀雄のいう「人間らしい意識」の働きにはならない。

　「がめつい奴」についての感想文は、だれにでもよく分かる金銭欲という卑近の例をもちいて、じつに大事なことを説いているのだ。偶然が偶然にとどまっているならば、そこには驚きはあっても、それを劇の要因に高めるエネルギーはない。偶然のとりこになっている人々は、わずかに、自然の一要素としての自分を意識しているに過ぎない。まさに吹けばとぶよな将棋の駒が右往左往しているだけの話である。これが「人間らしい意識」になるためには、偶然に驚くのではなく、逆に、これこそは自分に起こるべくして起こった必然であるとして受け止め、そこに自分の「運命」を読み取り、それを全うする誓いをたてる必要がある。つまり、それを道徳の水位でひきうける必要がある。そのときに、ひとは「劇」の主人公になる。ある使命を引き受けた人間が、その使命達成との関連において、偶然を、「事故」としてではなく「事件」として、「出来事」として、認識する。そこにこそ、真の冒険としての「人生」の可能性があらわれる。（ｴ）小林秀雄の特徴は、そのような生き方を、とくべつな英雄とか⑸イジンとかの専有とせず、ひたすら金を溜めるといういわばな欲望の追求にまで認め、しかも、「がめつい奴」の場合のように、それこそを積極的に人間として「合理的に生きること」とみなすところにある。金貸しの老婆も、誓いの強度によっては、ギリシャ悲劇の主人公と同等の生の質に達しうる。これは決してなはなしではないのである。　　　　　　　　　　　　　　（二宮正之『小林秀雄のこと』による）

（注）　○全集――『新訂　小林秀雄全集』（新潮社、一九七八―一九七九）。巻数を算用数字、数を漢数字で示している。

問１　傍線の箇所⑴⑵⑶⑷⑸の片仮名を適切な漢字に書き改めよ。

問２　傍線の箇所（ｱ）「標本になった蝶」とはどのようなことをたとえているか。本文の内容に即して二十五字以内で説明せよ。

問３　傍線の箇所（ｲ）「欲の皮のつっぱった人間が金儲けを己れに誓う」とはどのようなことか。本文の内容に即して三十字以内で説明せよ。

問４　傍線の箇所（ｳ）に「先手必勝の将棋には何の意味もない」とあるが、このたとえによって筆者はどのようなことを言おうとしているか。たとえの内容を明確にしながら六十字以内で説明せよ。

◎ 問５　筆者は傍線の箇所（ｴ）「小林秀雄の特徴は」から始まる一文を「それこそを積極的に人間として『合理的に生きること』とみなすところにある」とまとめている。ここに言う「『合理的に生きること』」を、筆者はどのようなことと捉えているか。本文全体の内容を踏まえて九十字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　⑴＝光景　　⑵＝上演　　⑶＝充足　　⑷＝翻弄　　⑸＝偉人

問２　Ａ文脈から切り離され、Ｂ一義的に定義づけられた Ｃ言葉。（24字）

　　［別解］Ａ文脈と切り離して定義された Ｃ言葉がＢ多義性を失うこと。

（25字）

Ａ＝４〔「文脈から切り離された」という内容があれば可。〕

Ｂ＝４〔「意味が一義的」「両義性・多義性を失う」などであれば可。〕

Ｃ＝２〔蝶が言葉の比喩であることを明示していることが必須。〕

問３　Ａ金銭欲の充足をＢ生きる目標として、Ｃ己に忠実に意志を貫くこと。

（29字）

Ａ＝３〔「金銭欲を満足させる」という具体的な内容が必須。〕

Ｂ＝３〔「生きる目標、存在理由を全うする」という内容であれば可。〕

Ｃ＝４〔「目標に忠実に生きる意志」という内容であれば可。〕

問４　Ａ客観的条件内の因果関係を読み解き、Ｂ未来を完全に見通して Ｃ最適な道筋を取る方法では、かえってＤ人生の価値が失われるということ。（60字）

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝３〔「客観的」「科学的合理性」などの説明がなければ減点２。〕

Ｂ＝２〔「未来を見通す」という内容であれば可。〕

Ｃ＝２〔「最適な方法を適用する」という内容であれば可。〕

Ｄ＝３〔「生きていく価値を失う」「人間らしい意識を失う」という内容であれば可。〕

問５　Ａ自然の因果律に支配されず、Ｂ言葉を用いて人間の歴史を作りつつ、Ｃ出来事を偶然ではなく己の運命の必然として受け止め、Ｄ自らの存在理由を全うしようとＥその使命を引き受けて主体的に生きること。（89字）

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔「自然界の因果律に従うだけではない」という内容であれば可。〕

Ｂ＝２〔「言葉を用いて」という内容がなければ減点１。〕

Ｃ＝２〔「偶然の出来事を必然だと受け止める」という内容は必須。〕

Ｄ＝２〔「自分の存在理由を全うする方向に生きる」という内容であれば可。〕

Ｅ＝２〔「自分の運命、使命を達成しようとする積極的な生き方」という内容は必須。〕